

論文審査の結果の要旨

氏 名 鈴 木 聡

鈴木聡氏の論文「信念のスタティクス、信念のキネティクス —ベイズ主義の正当化への試論—」は、確実な知識が得られない状況下での利用可能な情報によってどのように「信念」を改訂していくことが合理的なのか、という信念改訂の合理性を主題にした論文である。こうした主題は、おのずと「信念」と「確率」との相関を予期させる。というより、今日では、より自覚的に「確率」を「信念」の度合いとして規定する「確率の主観説」にのっとり信念改訂の合理性を理解する道筋がとられることが多い。このような道筋は「ベイズ主義」と呼ばれ、それは、現代分析哲学の最先端において経済学などとの連携のもとで論じられている「意思決定理論」の基礎をなすとみなされている。

鈴木氏の論文は、この「ベイズ主義」の二つの原則、すなわち(1)「信念状態-確率関数の原則：任意の合理的な信念状態は確率関数によって表現されうる」、(2)「信念変化-条件付けの原則：任意の合理的な信念変化は条件付けによって表現されうる」、という二つの原則の独自の正当化を試みている。鈴木氏によれば、原則(1)は「確率の主観説」に基づいており、よって、信念の度合いが、非負性公理・正規化公理・加法公理という確率計算の公理を満たすことを証明することで正当化される。しかるに、鈴木氏は、一般にこうした正当化のために用いられる「ダッチ・ブック定理」（確率計算の公理を満たさない信念の度合いに基づいて賭けを行うと信念主体がいつでも損をする賭けが成立してしまうという把握に見合う定理）は、適正価格関数についての共時的独立性という受け入れがたい考えを前提していると指摘する。そして、「ダッチ・ブック定理」に基づかない原則(1)の正当化のため、状態・帰結・行為の概念を用いて「公理系S」を提示し、さらに「価値中立命題」についてのラムジーの考え方を応用することによって、ありうべき正当化を試みる。また、鈴木氏は、原則(2)に関しても、条件付けと条件付き確率との相関を明らかにした上で、やはりその正当化の際に訴えられる「ダッチ・ブック定理」の不健全性を指摘する。その上で、原則(2)の正当化のためには、確実性条件および相対的な固定性条件が必要だと論じ及び、ジェフリー条件付けとフィールド条件付けという既成の考え方を吟味することを通じて、「相対的情報量最小の原理」にたどり着き、当原理に対するJB問題という反論を斥けることによって、当原理こそ条件付けの正当化の基盤であると論じるに至るのである。

鈴木氏の論文は、最先端の、しかもきわめてテクニカルな題材を扱うものであるがゆえに、技術的な思考に傾斜して、いささか哲学的意義についての論究が不足している感もなくはない。けれども、こうしたコンテンポラリーな重要課題について、これほど詳細に論争経緯を追い、なおかつ独自の立場を提示していることは、わが国の哲学研究全体にとっても大きな成果と見なせるものであり、博士（文学）の学位を授与するに十分値する論文であると判断する。